
羽化

春江 柚里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽化

【Nコード】

N 6 4 6 1 H

【作者名】

春江 柚里

【あらすじ】

従姉弟の一人娘で、少し変わったところがあり保育園の仲間に溶け込めない”彼女”。彼女の面倒をみる”僕”。僕の目を通して語られる、少女が女へと羽化するまで。

孵化（ふか）（前書き）

生々しい思春期の暗さがあるかもしれませんが。人間的な暗さなども
また、ロリータコンプレックス的な要素を含みます
（恋愛感情の萌芽は、ある程度の年齢になってからという設定です
が）。

そういったものに嫌悪がある方は、ご気分を害される可能性があります
ますので、

精神衛生上、ブラウザバックをおすすめいたします。

2009年8月10日 春江

孵化（ふか）

彼女を女として意識し始めたのはいつの頃からになるのだろう。

はじめは、子供としか思っていなかった。

近所に住む従姉弟の一人娘である彼女は、少し変わったところのある少女で、小さい頃から周りにとけこめずに一人で過ごすことが多かった。

よく僕に、色のない世界のお姫様が色を知る話や、擬人化された野菜たちが活躍する話、羽をなくした妖精の話など、即興の物語を聞かせてくれた。

彼女の母親である僕の従姉弟は、キャリアウーマンとしてある程度確立した地位の人だったから、子育てと仕事のバランスをとろうと必死だった。

そして、父親も同じように会社である程度のポストの人だったわけで、二人が彼女にかまう時間が少ないのは必然的なことだった。

たまたまそんな状態で、何とか保育園には通うものの、心を閉ざしかけていた彼女のお守りに僕が選ばれた訳だった。

その時の僕は気楽な大学生。ちょうど保育士を目指していたということもあり、実践しながら、彼女のお目付け役を授かった。

学校から帰って、すぐに保育園まで彼女を迎えにいった、従姉弟が帰ってくるまでの時間を一緒に過ごした。

土曜も従姉夫婦は当たり前のように出勤する。

大学生の僕は休日なので、彼女と一日一緒にすごすこともあった。そんな日は、一緒にお風呂に入って歌を歌ったり、髪を乾かしてやつたり、アイスクリームを食べたり、ただただ慕ってくれる彼女を、いとおしく思ったものだ。

まあ、それなりに我がままをきいたり、けんかをしたり、困ったこともたくさんあったのだけれど……。 (そう、この時の経験で、乙女心は秋の空と学んだ気がする)

彼女が小学校になるまで、ちょうど僕が大学を出るまで、僕たちは一日のかなり長い時間を共有していた。

最後の方は、彼女が大人のような口をきくようになり、「しょうがないね」と言いながら、僕のシャツの取れかけたボタンをつけかえてくれるようにすらなっていて、従姉弟に笑われたものだ。

そんな彼女も、小学校に通うようになり、ようやく友達もできて僕の手を離れていった。

そして、僕自身も社会人になったということもあり、覚えることや学びたいことも (そして仲間と遊ぶ時間も) 増え、しばらくは彼女に会うこともなかった。

ずいぶんの間、彼女と僕の間には、夏休みやお正月なんかには挨拶をする程度の関係が続いた。

孵化（ふか）（後書き）

こんにちは、春江 柚里（はるえ ゆり）です。

お読みいただきありがとうございます。

このお話は、孵化^{ふか}、蛹化^{ようか}、羽化^{うか}の三話で完結する予定です。

よろしければ、近日中に蛹化もUPする予定ですので、ご覧いただければ幸いです。

蛹化（ようか）（前書き）

この小説は、生々しい思春期の暗さがあるかもしれませんが。人間的な暗さなども。

また、ロリータコンプレックス的な要素を含みます

（恋愛感情の萌芽は、ある程度の年齢になってからという設定ですが）。

そういったものに嫌悪がある方は、ご気分を害される可能性がありますので、

精神衛生上、ブラウザバックをおすすめいたします。

2009年8月10日 春江

蛹化（ようか）

彼女が中学生になったばかりの頃、たまには様子でも見に行ってみるかと思いい立ち、従姉弟の家に向かった。

その日、彼女は僕への挨拶もそこそこに、アーモンド形をしたきれいな瞳を吊り上げて、僕の洋服がダサイと言って、すぐに自分の部屋へ引っ込んでしまった。

僕はひどくショックを受けて、なんとなく彼女が怖くなった。

今までに彼女と喧嘩をしたことはある。だが、今回は何かが違う。以前なら、僕にかまって欲しいという、そう、そつとこちらを覗き見するような……そういう隙があった。

でも、今の彼女は違う。鋭利な刃物のように鋭く、隙がない。

いつまでも、乳歯の抜けた、まぬけな笑顔の彼女の残像がつきまとう僕には、今の彼女は、まるで違う生き物になってしまったかのように感じられた。

自分とは違う世界へと踏み出した少女。

これが、思春期（ししゅんき反抗期）の女の子というものなのだろうか。

僕は、自身の反応にとまどう。

自分が拒絶されたことが怖いのだろうか？ いや、そうではない。怖いのは彼女そのものに対してだ。

今まで、僕たちは知らないからこそ同じ場所にいた。だが、彼女は知ってしまったのだ。

自分という存在がある場所を。場所が場所であることを認識してしまった。

だから、もう、同じ場所に帰ることはできない。

彼女は白いところに立ち、きつぱりと僕を黒と認めた。そんな気がする。

そして僕は、白が怖い。

その、無垢で、覇気のある、潔癖な色が……どうしてだろう、怖い

のだ。僕が触れてはいけない領域のような……。

結局、僕には異質な空間と化した彼女の部屋に入る勇気が持てず、従姉弟には用があるとだけ告げ、すぐに帰ってしまった。

しばらくの間、従姉弟の家を訪問することはなかった。

そろそろ彼女も高校生といったころのこと。突然、夜更けに僕の携帯に着信があった。

従姉弟の家の番号からだ。

コール数は、3秒くらい……が2回。その不審な履歴に、何かあったのだろうか、首をかしてリダイヤルすれば、うわずった声の彼女が電話にでた。

彼女は、少し黙ったかと思うと、突然泣きだした。

「……ごめん……な……め……ん……さい」

しゃくりあげ、必死に謝罪の言葉を口にする彼女。

わからない。

つい、昨日のことのこのように思い出される、挑発的な彼女の射るような視線。

そこからは、謝罪の言葉など想像できなかった。

僕が感じた恐れは、ただの気のせいだったのだろうか。

僕は、子供のように甲高い声をあげて泣く彼女に拍子抜けして、肩の力が抜けていくのを感じた。

どこか冷静になったとたんに、あわてて泣いている子供をなだめなくてはいという思いに駆られ、すぐに彼女に、気にしていないから安心してくれと告げた。

携帯越しに、彼女の甘い声がする。

その声が、いつまでも僕の耳にまわりついてはなれない。

僕の中で何かが波立ち、ボコボコと気泡が上がっては消えるような、酔いにも似た感覚に襲われた。

蛹化（ようか）（後書き）

こんにちは、春江 柚里（はるえ ゆり）です。

お読みいただきありがとうございます。

このお話は、ふか 孵化、ようか 蛹化、うか 羽化の三話で完結する予定です。

季節の描写がなくあいまいな部分をどうにかしようと思います。
少しずつ読めるものを作っていこうと思います。

最後の話を作成中です。もしかすると羽化するのは彼女じゃなくて

……

羽化（うか）（前書き）

生々しい思春期の暗さがあるかもしれませんが。人間的な暗さなども
また、ロリータコンプレックス的な要素を含みます

（恋愛感情の萌芽は、ある程度の年齢になってからという設定です
が）。

そういったものに嫌悪がある方は、ご気分を害される可能性があります
ますので、

精神衛生上、ブラウザバックをおすすめいたします。

2009年9月6日 春江

羽化（うか）

週末、ケーキの入った白い紙箱を片手に、僕は従姉弟を訪ねた……いや彼女を。

マンションのエントランスを抜け、エレベーターホールまで来ると、僕は人差し指で「上」ボタンを押した。押しつけられたプラスチックのボタンが、カチツというチープな音をたてたと同時にほんのりとオレンジに発光した。

エレベーターは3機ある。1機は整備中。残りは2機。待ち人は僕一人。

従姉弟が住むのは5Fの角部屋だ。エレベーターは、30階と28階にいる。

30階の方は、下へと向けて降りてきているが、28階の方は上へと向かっている。

僕は降りている方を頼りにすることにした。

階数をしめすデジタル表示のモニタは、初めのうちこそ激しく形を変えたが、下りは20階、17階、10階と途中にとどまって、しばらく動かなくなる。

上りは、やはり上り続けたままだ。

待つことがももどかしく感じられ、僕は階段を使うことを選んだ。

階段へは、来た道を少し戻らねばならない。

きびすを返し、少し戻れば、無機質な灰色の扉に”非常階段”の赤い文字が飛び込んでくる。

すぐに丸い金属のドアノブを握ると、すいつくような、ひんやりとした感触がした。

時計回りに引き寄せれば、手には金属特有の無機質な感覚が伝わってくる。

重さのある扉を開けると、こもった空気が流れこんできた。

その、窓のない階段は、四方をすすけた白壁に囲まれ、奇妙な息苦しさがある。

足を踏み出したと同時に、後ろでガチャンという激しい音がした。予想したよりも、激しく大きな音に驚きながらも僕は歩みを止めない。

足の先で段をけり、手すりを引き寄せる力の反動を使い、一段また一段と高みを踏みしめる。

汗ばんだ手に硬い感触を感じる。厚紙だ。手に持った紙箱のもち手が食い込んでくる。

僕はあわてて、ケーキの存在を思い出して、今さらながらにエレベーターを使わなかったことを後悔した。

ケーキには、ホイップされたクリームや色とりどりの果物が乗っている。

見た目がくずれてしまうのは、まずい。箱を空けた瞬間の、嬉しそうな彼女の顔がみたい。

そのために、わざわざ女性の同僚から女の子が喜びそうな洋菓子店を頼み込んで紹介してもらったのだから。

深い青色のリボンがついた紙箱の中には、彼女が想像する宝物が入っていないならならぬ。

決して……宝物の残像を残す塊であってはいけいない。

紙箱を、水平に保つように気をつけながら、僕は、階段を上がりながら、全神経を手に集中させた。

3階の踊り場あたりで、足が重くなるのを感じ、ついに4階では息が上がってきた。

途中、若い男女とすれ違い、すれ違いざまに会釈をした。

二人が僕にちらりと視線を送るので、僕は自分が赤ら顔で荒い息をした不振者に見えるのではないかと不安になり、急に恥ずかしくなってきた。

だが、そんな心配をよそに、二人はまたすぐに会話に花を咲かせはじめたのだった。

残る数段を上り終え、我慢できずに大きく息を吐き出した。

しばらく身を屈めて、呼吸が整うのを待ってから、着ているものを整えた。

昨日デパートで選んでもらった、丸襟のクレリックシャツと細身のパンツに皮のベルト。

一応、鏡で見た自分はそれなりにキチンとした格好をしていたように思う。

従姉弟の家の扉が見えてくると、僕はモニタつきのインターフォンを押した。

あらかじめ来訪は従姉弟には予告してあったので、すぐに扉が開いて迎え入れてくれた。

靴をそろえて振り向くと、白いワンピースを着た彼女の姿が見えた。彼女は、どうしていいのかわからないと言った様子で、目を伏せてうつむいていた。

僕は、彼女の目線にあわせて笑った。

腹をくくったように彼女も笑った。

その笑顔は、目元の形だとか口元のゆがみが、間違いなく彼女が、彼女であることを思い出させてくれた。

ケーキがの箱を差し出すと、目を大きく開けて驚いた顔が、すぐに笑顔に変わった。

ありがとう。そのシャツ素敵ね。

彼女のその言葉に、全てが報われた気がした。

さっそく、リビングでケーキの箱を開けた二人の女性の驚きように言ったら、僕を満足させるのに十分すぎるほど十分な反応だった。心外にも従姉弟からは、あなたも、こういうこ洒落たことが出来るようになったのねえとのお言葉を頂戴した。

ケーキならいつも手土産に持ってきているだろう、と反論すると、

いつもの駅前のケーキ屋では芸がないと思ってたのよという答えが返ってきた。

彼女も母親と同じ意見だったのか、箱の中のケーキに乗った果物を一つ一つじつと見入っている。その、真剣な表情がどこか微笑ましい。

ケーキ一つでこんな顔をしてくれるのなら、もっと……努力すべきだったのかもしれない。

従姉弟の旦那さんは出かけているそうで、一つ残ったケーキは冷蔵庫に保管された。

三人で、たあいもない話をしながらお茶をする。

僕の近況をききながら、従姉弟と彼女がいちいち反応してきて、このケーキをどのように仕入れてきたのかまで全部語らされてしまった。

そして話は、洋菓子店を紹介してくれた同僚の女性におよび……恋人じゃないのと従姉弟にからかわれ、彼女はじつとこちらをみつめていた。

あわてて僕は、ただの同僚だよと弁解した。従姉弟は意味深長に、ふーんとうなづいただけであつた。

彼女がすぐに別の話をふってきたので、遠慮なく僕は乗らせてもらうことにした。

従姉弟は洗い物をすると言って、扉一つはさんだ台所に消えて行った。

手伝おうかと声をかけるとキッチンまでお皿を運ぶのを手伝わされ、それ以上は求められなかったのでリビングへ戻った。

その時目にした光景がとても印象的で、思わず僕は立ち止まってしまった。

リビングは明るい日の光に満ち、ソファーには彼女が無防備にもたれている。

閉じられた瞳をふちどるのは、小刻みにゆれる睫。しなやかな足が

開放的に伸ばされ、細い腕が、ギュツとクッションを掴むあどけなさ。

今までに、こんなにキレイなものを見たことがあるだろうか。

成熟を迎える前の、幼さを含む、ひどくアンバランスな、それゆえにどこか人を引きつけるある種の魅力。

僕はその髪に触れたいと思った。

口元にかかっている髪を払ってやる、という口実を自分に言い聞かせ、手の甲で彼女の頬に触れた。

すべらかな、つるりとした肌の感触が心地よい。細いやわらかな髪の毛の感触は以前と変わらず、どこかなつかしい。

髪から手を離すと、待っていたといわんばかりに彼女は目をあけて、僕の額に自分の唇を押し付けた。

唇は柔らかく、シャンプーの甘い香りがした。

彼女は、すぐ立ち上がると、僕に背を向けてふわりと数歩進んだ。

三歩目で、迷ったように動きが緩慢になったので、振り向くのではないかと僕は期待した。

しかし、それはただの空想と終わり、彼女は階段を上って二階の自分の部屋へと消えてしまった。

しばらく、僕は呆然と彼女が立ち去るまでのその動きを、一コマ一コマ再生して、ぼけつと彼女の消えた方向を見つめていた。

背に、カチャカチャという音が聞こえはじめ、それは徐々に現実味を帯びたものとなり、皿を洗う音だと気づけば従姉弟の存在を強く感じさせた。

これは本気なのだろうか。それとも遊ばれているのだろうか。自分の中に、再び高まる衝動を感じた。

蛹を脱ぎ捨てた蝶は、誘うように、ひらひらと鮮やかな記憶を残して目の前から消えてしまった。

僕は引き寄せられるように、彼女の後を追う自分をどこか遠くから眺めていた。

蝶に引き寄せられた蝶は、羽をひろげて、自らもふわりと飛び去ったのであった。

了

羽化（うか）（後書き）

お疲れ様でした。最後までお読みくださりありがとうございます。

ふわりと少女を羽化させたい！をテーマに書いた駄文です。

空に飛び立つ前に、ベチャッと地面に突撃させたくはないなど必死にがんばりましたが、まだまだ未熟で、ちゃんと飛んでいるか心配です。

というか、なぜか主人公も飛んじやいましたが、これは予定外です（笑）

設定が消化しきれていない部分や、表現が伝わりにくい部分など多々あるかと思いますが、少しでも共感であつたり、微笑ましく思っていただけの部分があれば幸いです。

最後に、いろいろと指摘をうけた作品ではありますが、それゆえに、感じ方の温度差などを学んだ作品でもあります。

好きな部分を素直に伝えてくれた友人、続き書いてねという言葉してくれた友人、きつい指摘の数々をしてくれた友人たちへ感謝したいと思います。

今の私には、その指摘の意味を理解することができませんので、おっしゃる指摘のレベルにさえ達していないのでしよう。

書いていくうちに少しでもその意味を実感できるレベルになればいいなと思い、しばらくそのご指摘は大事にしまっておこうと思います。

遅筆でも書き続けることでつかめるものがあると信じて。

2
0
0
9
·
春
江

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6461h/>

羽化

2010年10月28日04時50分発行